

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380904

研究課題名(和文) 学校危機アセスメントを基盤にした学校予防教育導入のフレームワークの構築

研究課題名(英文) Developing a framework of School Preventive Education based on School Crisis Assessment

研究代表者

渡邊 弥生 (WATANABE, Yayoi)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：00210956

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：学校危機予防アセスメントを開発し大規模な教員のデータを獲得した。特に、組織づくり、連携の方法において校務分掌によって危機対応の満足度に相違があり、管理職に比べて、問題に直接対応する教員の方が危機対策に対して不満足であった。教員間のコミュニケーションやコーディネーションが乏しいことが示唆された。また、スクールワイドのいじめ予防プログラムや学校の雰囲気をよくする取り組みなどが導入され、効果が検討された。その結果、基本的及び応用的なソーシャルスキルの向上が確認された。危機別の対応方法についても、いじめや事故対応の介入について教育委員会の研修に組み入れ実施することができ教員の不安の緩和に貢献した。

研究成果の概要(英文)：We developed the school crisis preventive assessment and acquired extensive data on the faculty. In particular, there were differences in the degree of satisfaction over the crisis response by the Division of School Affairs in the method of organization and collaboration. The teachers who had responded directly to the problems, were more dissatisfied than management, with the crisis countermeasures. It was suggested that the communication and coordination between the teachers was poor. Moreover, the school-wide bullying prevention programs and the efforts to improve the school's atmosphere were introduced. We examined their effects. As a result, improvements in basic and applied social skills were confirmed. We were able to incorporate the countermeasures, differentiated by crises, into the training courses of the Board of Education on the intervention of bullying and accident response, thereby contributing to the alleviation of faculty anxiety.

研究分野：発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学

キーワード：学校危機予防 ソーシャルスキル 感情リテラシー 予防教育 レジリエンス フレームワーク

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、学校危機認知の視点を強化した「学校予防教育」の導入のあり方に関するフレームワークの構築を目指している。その背景としての課題は大きく3点であった。

(1)学校危機予防対策の不十分さの克服：欧米では、スクールサイコロジストなど学校適応予防援助の専門家を中心に学校危機予防対策が積極的に推進されているにもかかわらず、わが国において十分に導入されていないことであった。各学校の取り組みは、管理職を中心に火災、地震、いじめ、不審者侵入など学校の危機別にマニュアルが作成されるよう求められているが十分ではない。また、作成されている場合でも、学校スタッフ全体で共有し、予防対策を具体的に検討するところまではなされていない。実際に、組織単位での学校危機についての満足度やニーズについてはアセスメントもなされていない。介入と同時に予防教育を行うことは、学校スタッフの不安や心配を軽減させ、いざというときに最重要である冷静さを生み出し、より適切な介入を行う可能性を高めると考えられる。

(2)子どものソーシャルスキルや感情リテラシーの育成：危機予防と同時に、子ども達自身のコンピテンスやレジリエンスを高めておくことが重要である。個々の力を高めることはトラウマを予防することになり、また問題が大きくなることを防ぐことができる。ところが、こうした子ども達のソーシャルエモーショナルなコンピテンスを高めるアプローチが学校のカリキュラムに取入れられていないのが実情である。

(3)アセスメントツールの充実：先に述べたソーシャルスキルや感情リテラシーなどを測定する正確なアセスメントツールが開発されていない。自己評価による質問紙はあるが、客観的な評価をすることができない。そこで、意図がわからず、バイアスや社会的望ましさが混入しないゲーム型アセスメントツールを開発することも検討している。

## 2. 研究の目的

以上の背景をもとに、大きく3つのことを目的としている。

(1)学校危機アセスメントを開発し、実際にデータを取り、学校危機予防の6領域の満足度の相違について明らかにする。

(2)そのうえで、学校危機予防の必要性を提唱し、実際に学校危機予防の対策や、実際に危機が起きた場合の介入のあり方等をシミュレーショントレーニングする。

(3)学校危機のうちのいじめを例にとり、実際にいじめ予防のためのソーシャルエモーショナルラーニングのアプローチを学校に導入する。また、その効果を検討する。その際、先のアプローチの効果を測定するために従来の質問紙の他、ゲーム型アセスメントツールを活用する。

## 3. 研究の方法

(1)学校危機予防アセスメントの開発と満足度の測定

学校危機関連の先行研究(Varnava, 2004)から、学校と家庭の連携[連携]、予防の基盤となる価値の共有[価値]、予防を推進する校内組織体制[組織]、安全・安心が得られる環境[環境]、多様な予防的取組が児童生徒に届く活動[カリキュラム]、多様な研修[研修]の6観点にソーシャルスキルを加えた質問紙(51問)でアセスメントを行った。

参加者は、学校関係者(特別支援、養護、管理職、教育相談、生徒指導などすべての職務を含み、学校種は小学校、中学校、高校であった。

(2)学校危機別介入シミュレーションの実施

学校危機は、事件事故や災害など多岐にわたる。そして、危機の内容によって、学校構成員に与える影響や、状況の収束の見通しなどは異なってくる。こうした学校危機において、子どもの安全や安心を確保し、学校の日常性を回復させること目指す教育委員会の対応は非常に重要であり、その質を向上させることが強く求められていると言える。そこで、本研究では教育委員会の学校危機発生時における対応の質的向上を目指すためのシミュレーション研修を開発した。

研修課題は、3年間で異なる学校危機に関するシミュレーション訓練を体験し、状況に応じた対応をとれるようになるよう構成した。1年目はいじめが疑われるプールでの事故編、2年目がいじめ自殺編、3年目が災害編であった。そうして指導主事が3年間で異なる事例を扱うことにより、多様な学校危機に対する対応力をつける研修を行った。

そして、研修は次の3つの内容で構成した。

事例について対応を考える「クライシスマネジメント」、この事故を予防するために必要な対応を考える「リスクマネジメント」、

リラックス法(小林ら, 2010)の体験であった。では、事例を配布した後、「学校は何をしていかなければなりませんか?」について対応を書き出してもらった。さらに、「市町村教育委員会は、学校に対してどのような指導・支援ができるのでしょうか?」と質問し、グループで話し合いを行った。では、事例のような事故について、「どうしたらこうした学校危機を予防できるか?」という質問をし、考えられる対応についてグループで話し合いを行った。とでは、実際の危機状況に近づくため、時間を区切って、次々に事例の情報を提供したり、質問をしていき、参加者に判断を求めた。

(3)いじめ予防のためのソーシャルエモーショナルラーニング(SEL)の導入

小学生4年生を67名対象に、ソーシャルエモーショナルラーニングのプログラムを実施するクラスと、実施しないクラスを設けて検討した。ターゲットスキルは、他人の気持ちを汲み取る、友達を喜ばせる、自分の気

持ちを上手く伝える、の3つであった。

アセスメントは、社会性と感情の能力を測る児童用の尺度 SES-C(Tanaka et al., 2011)であった。その他、Craig et al., (2015)で成果を明らかにしているが、日本版 Zoo-Uを用いた。これは、ゲーム型の SEL のアセスメントツールである。

授業案は、これまでのソーシャルスキルトレーニングの枠組みをもとにし、インストラクション、モデリング、リハーサル、フィードバック、チャレンジといったステップを含めている。

#### 4. 研究成果

##### (1) 学校危機予防アセスメントの開発と満足度の測定

質問紙調査の回答を分析した結果、学校危機予防の認識は小学校では職務・分掌間で差が見られなかった。一方、管理職は中学・高校総じて学校危機予防が十分行っているとの認識である傾向が高く、特別支援教育・生徒指導・教育相談など学校適応援助の担当者は学校危機予防への対応が十分でないとの認識される傾向が示された。加えて高校では、学級担任・学年主任が学校危機予防に関して十分でないと感じていた。学校危機に関する案件に直接関与する職員の方が、低く評価していることが多い。高く評価した管理職には、いかに課題を共有するかが学校危機への備えを組織で行う上で重要であるといえる。

また、6領域間の比較で、価値・研修・連携に対しては高い評価が示されたが、危機予防への組織の認識は、低く評価された。これは校種間で共通した結果であり、学校危機予防に関する具体的備え等舞えん地面との視点の重要性が示唆される結果となった。

これらのことで、今後学校危機予防の研修を中等教育機関において行う際は、危機予防のニーズ理解に対する理解を得ること、またすべての校種において管理職には課題意識を喚起できる資料提示が必要である。加えて全校種で課題とされる学校危機予防に向けた組織面からの活動についてはプログラムとしての提示等の工夫が必要と考えられる。

##### (2) 学校危機別シミュレーションについて

研修参加者には学校危機対応への不安や自信に関する3項目を、研修会前後で尋ねた。1年目の事故編では、学校危機に関する不安について、「実施するように求められたらどのくらい不安か」という質問に、PREでは、「不安」が最も多かったが(41.2%)、POSTでは「少し不安」が最も多くなった(47.1%)。「間違ったらと思うとどのくらい不安か」という質問には、PREでは「とても不安」が41.2%であったが、POSTでは「まったく不安なし」が38.2%で最も多くなった。さらに、「どのくらい自信があるか」の質問には、PREでもPOSTでも「少しだけ自信」が最も多かったが、67.6%から70.6%に推移していた。

さらに、研修会の前後でt検定により比較を行ったところ、3つの項目すべてで有意な差が認められた。不安に関する2項目では有意に減少し(共に  $p < .001$ )、自信に関する1項目では有意に上昇したことがわかった( $p < .01$ )。

事故編、災害編も共に同様の傾向となり、実際の状況に近いシミュレーション研修が教師の学校危機対応への不安を低減させ、自信を高めることにつながることを示された。

また災害編の研修のために作成されたチェックリスト(小林ら、2017)は、熊本地震において熊本県教育委員会、大分県教育委員会、熊本市教育委員会に提供され、各委員会を通じて市町村教育委員会指導主事に配布され、活用され好評を頂いた。また静岡県教育委員会も市町村教育委員会に指導主事に配布した。

さらに、2017年度から高知県教育委員会が市町村教育委員会の悉皆研修として本研修が導入され、今後行っていくことになるなど、実際の被災地や指導主事研修に活用されている。

##### (3) いじめ予防のためのソーシャルエモショナルラーニング(SEL)の導入効果

この結果、下記に示したように、Zoo-Uでは、衝動の調節や遊びに誘うスキルなどで、プレテストからポストテストに向けて、向上が認められた。社会性と感情の尺度においては、基礎スキルも応用スキルも効果が認められた。感情の調節や共感性、協力といった側面も有意差はなかったが、得点が高くなった。

今後、さらに授業に活用しやすく効果がある授業案を作成していく予定である。

Zoo U and SES-C

Zoo-U score	PRE (Mean)	POST (Mean)
Emotional regulation	6.51	6.52
Communication	6.91	6.04
Impulse control	0.16	0.36
Empathy	14.16	14.34
Cooperation	1.64	1.85
Social Initiation	17.79	18.5
SES-C		
Basic	75.24	78.55
Applied	46.36	48.71

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計24件)

- (1) 林田篤伸、西山久子(2017). 中学生へのクラスワイドな積極的行動支援(PBIS)の成果に関する研究—一次的援助サービスとしての規範行動の向上に向けて、福岡教育大学紀要、66、125-133.
- (2) 持丸修一郎、西山久子(2017). 学校適応を促進させるピア・サポートプログラムの研究—小規模小学校中・高学年での生徒

- 指導の実践を通して 福岡教育大学紀要、66,1-8.
- (3) 西山久子、小泉令三、石隈利紀、大野精一(2017). 熊本自身スタート支援における支部間サポートネットワーク-東日本大震災からの学びを生かす取り組みから日本学校心理士会年報、9,107-114.
- (4) 小林朋子、海野義晃、鈴木秀和、近藤正雄、高橋都貴子(2017). 災害時における市町村教育委員会指導主事の対応チェックリストの作成-直後の状況確認からケアも含めて、静岡大学教育実践総合センター紀要、26,19-25.
- (5) 渡辺弥生(2016). 予防教育としてのレジリエンスの育成、臨床心理学、96,690-694. (Brown, J. A., Watanabe, Y., Lee, D. H., McIntosh, K. (2016). School psychology research and practice in East Asia: Perspectives on the past, present, and future directions of the field. School Psychology International, 37, 557-582.
- (6) 渡辺弥生(2016). 児童の感情リテラシーは教育しうるか-発達のアウトラインと支援のありかた エモーションスタディーズ 2,16-24.
- (7) 原田恵理子、渡辺弥生(2016). 教職課程の学生に求められるソーシャルスキル教育実践学研究、19,1-12.
- (8) 渡辺弥生、谷村圭介(2016). ソーシャルスキルおよび相互作用対象者の性別が初対面場面での対人行動に及ぼす影響 法政大学文学部紀要、72,187-201.
- (9) Watanabe, Y. Kayou, L. (2016). Children's motives for admitting to prosocial behavior. Frontiers in Psychology : Developmental Psychology, 7, 1-9.
- (10) 渡辺弥生(2016). 道徳性の発達、指導と評価、2,9-11.
- (11) 渡辺弥生(2016). 子どものレジリエンスを育てるかかわりとは、健康教育、783,20-22.
- (12) 渡辺弥生、谷村圭介(2016). ソーシャルスキルおよび相互作用対象者の性別が初対面場面の対人行動に及ぼす影響、法政大学文学部紀要、72,187-201.
- (13) 渡辺弥生 (2016). 道徳性の発達 指導と評価、2,9-11.
- (14) 渡辺弥生 (2016). 子どものレジリエンスを育てるかかわりとは、健康教育、2(783),20-22.
- (15) 西山久子、石隈利紀、大野精一、PFOHL W. (2016). 欧州におけるクライシスマネジメントの基盤造りに向けた専門性向上の取り組み-ESPCTによる School Psychologist 向け研修から、学校心理士年報、7,123-131.
- (16) Saeki, E., Watanabe, Y., Kido, M. (2015). Development and gender trends in emotional literacy and interpersonal competence among Japanese children, The International Journal of Emotional Education, 7(2), 15-35.
- (17) 渡辺弥生、鈴木菜々(2015). 児童期における対人葛藤場面での対人交渉方略と対人文脈-友人、親、教師との関係から 法政大学文学部紀要、71,113-124.
- (18) 渡辺弥生(2015). 健全な学校風土をめざすユニバーサルな学校予防教育-免疫力を高めるソーシャルスキルトレーニングとソーシャルエモショナルラーニング、教育心理学年報、54,126-141.
- (19) 渡辺弥生 (2015). 子どものレジリエンスは感情を育てることから 特別支援教育研究、96,16-19.
- (20) 小林朋子(2015). 災害4年後の教師の心理的影響に着いて-中越大地震を経験した小中学校教員を対象として 学校保健研究、57,192-199.
- (21) Craig, A. B., DeRosier, M. E., & Watanabe, Y. (2015). Differences between Japanese and U.S. children's performances on "Zoo-U": A game-based social skills assessment. Games for Health Journal, 4, 1-9.
- (22) 渡辺弥生 (2014). 学校予防教育に必要な道徳性と向社会的行動の育成、発達心理学研究、25,422-431.
- (23) 渡辺弥生 (2014). 職業観を高める就業体験のあり方-生徒の心の発達に応じたプログラム、産業と教育、9,2-7.
- (24) 渡辺弥生 (2014). 児童の発達と課題-気持ちに寄り添うかかわりとは、児童心理、4,14-21..
- 〔学会発表〕(計36件)
- (1) 原田恵理子、渡辺弥生、若本澄子、西野恭代(2016). 児童生徒のコミュニケーション・トラブルの予防に向けて(3)-SSTによるいじめの抑制に関する効果の検討- 原田恵理子・渡辺弥生・若本澄子・西野恭代 日本教育心理学会第58回総会 10月8日、サンポートホール高松・かがわ国際会議場(香川県、高松市)
- (2) 渡辺弥生(2016). エビデンスに基づいたいじめ予防教育プログラムの開発に向けて-中学生・高校生・大学生・教師を対象とした調査結果から- 日本教育心理学会第58回総会(高松)10月8-10日 サンポートホール高松・かがわ国際会議場(香川県、高松市)
- (3) 小林朋子、海野義晃、渡辺弥生、西山久子(2016). 学校危機を想定したシミュレーション研修に関する研究(2)-いじめ自殺を想定して-日本学校心理学会第18大会、10月1-2日 名古屋国際会議場(愛知県、名古屋市)
- (4) 原田恵理子、渡辺弥生(2016). 情報モラル教育に対する教員の認識 中学生を対象とするソーシャルスキルトレーニングの

- 実践から日本カウンセリング学会第 49 回大会、35. 8 月 26-27 日 山形大学 (山形県、山形市)
- (5) Harada, E., Watanabe, Y. (2016). Social skills training including education on informational technology ethics International Congress of Psychology in Yokohama, 148. July 24-29. PACIFICO Yokohama (Kanagawa, Yokohama-shi).
- (6) Shaura, R., Watanabe, Y. (2016). The effects of modeling on acquiring social and emotional skills for elementary school students. International Congress of Psychology in Yokohama, 142, July 24-29. PACIFICO Yokohama (Kanagawa, Yokohama-shi).
- (7) Nishiyama, H., Chan, M. C. R., Watanabe, Y. (2016), Designing School Crisis Prevention in East Asia International Congress of Psychology in Yokohama. 168. July 24-29. PACIFICO Yokohama (Kanagawa, Yokohama-shi)
- (8) Nishiyama, H., Ito, A., Watanabe, Y., Momcilvic, O. (2016). Promoting School Crisis Prevention for Safe and Positive School Counselor/Teacher Training and Psycho-educational program Development. International School Psychologists Association, July 20-23. (Amsterdam, Holland)
- (9) 渡辺弥生 (2016). 感情リテラシーの発達をベースにした感情教育の具体的な実践 シンポジウム「子どもの」コミュニケーションと感情育成ー感情研究のさらなる応用に向けてー」日本感情心理学会第 24 回大会 11. 6 月 18-19 日筑波大学 (茨城県、つくば市)
- (10) 原田恵理子、渡辺弥生 (2016). 現代高校生の思いやりは能力は向上しているかー役割取得能力の視点からー 日本発達心理学会第 27 回大会発表 (札幌) 4 月 29 日-5 月 1 日 北海道大学 (北海道、札幌市)
- (11) 田代琴美、渡辺弥生 (2016). 児童期における友人関係の感情表出とソーシャルスキルとの関連 日本発達心理学会第 27 回大会 4 月 29 日-5 月 1 日北海道大学 (北海道、札幌市)
- (12) 本村祐里佳、渡辺弥生 (2016). 児童期における感情リテラシーの発達と共感との関連 日本発達心理学会第 27 回大会 4 月 29 日-5 月 1. 北海道大学 (北海道、札幌市)
- (13) Nishiyama, H., Watanabe, Y. (2015). How does each school personnel see crisis preparedness? 4<sup>th</sup> Asian Conference on Psychology and Behavioral Science. March, 26-29. Rhiga Royal Hotel (Osaka-fu, Osaka-shi).
- (14) Fujino, S., Watanabe, Y. (2015). Emotional literacy among school children. 4<sup>th</sup> Asian Conference on Psychology and Behavioral Science. March, 26-29. Rhiga Royal Hotel (Osaka-fu, Osaka-shi)
- (15) 原田恵理子、渡辺弥生 (2015). SST に参加した教職課程の学生は何を学ぶのか、日本教育心理学会第 57 回大会、8/26-28., 新潟コンベンションセンター (新潟県、新潟市)
- (16) 蓑島天満、渡辺弥生 (2015). 青年期における感謝概念の発達と学校適応の関連、日本教育心理学会第 57 回大会、8/26-28., 新潟コンベンションセンター (新潟県、新潟市)
- (17) 飯田順子、杉本希映、青山郁子、五十嵐哲也、遠藤寛子、渡辺弥生 (2015). 学校における新しい援助サービスの創造、日本教育心理学会第 57 回大会、8/26-28., 新潟コンベンションセンター (新潟県、新潟市)
- (18) 渡辺弥生 (2015), 世界の学校心理士の役割と機能から日本の学校心理士の役割と機能を考える、日本学校心理学会第 17 回大会、7/18-19. 大阪教育大学 (大阪府、大阪市)
- (19) 小林朋子、鈴木秀和、渡辺弥生、西山久子 (2015). 学校危機を想定したシミュレーション研修に関する研究 (1) -いじめの可塑性が疑われるプールでの事故を通して、日本学校心理学会第 17 回大会、7/18-19. 大阪教育大学 (大阪府、大阪市)
- (20) 飯田順子・池田真依子・渡辺弥生・松本真理子・西山久子・瀧野揚三 (2014). シンポジウム：世界の学校心理士の役割・機能から日本の学校心理士の役割・機能を考える 日本学校心理学会 第 16 回神奈川・東京大会 . 9 月 6-7 日玉川大学 (東京都、町田市)
- (21) NISHIYAMA, Hisako, WATANABE, Yayoi, FUJINO, Sayuri. (2015). Poster: How Does Each School Personnel See Crisis Preparedness? The Asian Conference of Psychology and Behavioral Sciences, March 26-29. Rhiga Royal Hotel (Osaka-fu, Osaka-shi).
- (22) 西山久子・渡辺弥生 (2015). ポスター：学校危機予防への認識に関する検討 - 学校種による差異に着目して 日本カウンセリング学会第 48 回大会 8 月 29-30 日教育大学・環太平洋大学 (開催地：岡山県、岡山市)
- (23) 小林朋子、渡辺弥生、伊藤亜矢子、西山久子 (2015). 学校危機を予防するための支援体制づくり 日本心理学会第 79 回大会、9/22-24. 名古屋国際会議場 (愛知県、名古屋市)

- (24)原田恵理子、渡辺弥生(2015). 教職志望者による SST の効果、日本心理学会第 79 回大会、9/22-24.名古屋国際会議場(愛知県、名古屋市)
- (25)原田恵理子、渡辺弥生(2015).自尊心の発達の特徴とソーシャルスキルとの関連 日本発達心理学会第 26 回大会、3/20-22. 東京大学本郷キャンパス(東京都、文京区)
- (26)渡辺弥生(2015). 公正判断研究の最前線、日本発達心理学会第 26 回大会 3/20-22. 東京大学本郷キャンパス(東京都、文京区)
- (27)渡辺弥生、庄司一子、岩立京子(2015). 生涯発達を通じた予防教育、日本発達心理学会第 26 回大会 3/20-22. 東京大学本郷キャンパス(東京都、文京区)
- (28)Watanabe, Y.(2014). The implications for evidence-based approach at school settings. International Congress of Applied Psychology. Jul 8-13.(Paris, France).
- (29)Nishiyama, H., Watanabe, Y., Harada, E., & Ide, A. (2014). Differences in recognition of crisis response among staff to foster a safe school environment. International Congress of Applied Psychology. Jul 8-13 (Paris, France).
- (30)Watanabe, Y. & Gouveia, A.(2014). Cross-national insights on love and communication in intimate relationship of adolescents in Japan and Brasil. International Congress of Applied Psychology. Jul 8-13 (Paris, France).
- (31)藤野沙織、渡辺弥生 (2014). 幼児の感情リテラシーの発達、第 78 回大会日本心理学会、9/10-12.同志社大学(京都府・京都市)
- (32)渡辺弥生 (2014). 学校予防教育における感情教育の可能性、第 78 回大会日本心理学会、9/10-12. 同志社大学(京都府・京都市)
- (33)原田恵理子、渡辺弥生(2014).指導者となる学生に求められるソーシャルスキルとその養成のあり方とは?第 78 回大会日本心理学会、9/10-12.同志社大学(京都府・京都市)
- (34)原田恵理子、渡辺弥生(2014).高校に置ける総合的な学習の時間、特別活動をつなぐ包括的 SST、日本教育心理学会第 56 回大会、11/7-9. 神戸国際会議場(兵庫県、神戸市)
- (35)小林朋子、渡辺弥生 (2014).教師の要因によってソーシャルスキルトレーニングの効果に違いが出るのか?(2)日本教育心理学会第 56 回大会、11/7-9. 神戸国際会議場(兵庫県、神戸市)
- (36)Watanabe, Y., Lee, K.(2014). Development of Japanese children's motivation for telling lies or truth about prosocial behaviors, Nov.6-8. Pasadena (U.S.A., LA)

〔図書〕(計 10 件)

- (1)渡辺弥生 (2017). 発達心理学 北大路書房、187.
- (2)渡辺弥生 (2016). 中学生・高校生のためのソーシャルスキルトレーニング. 明治図書、126.
- (3)渡辺弥生 (2016). 新・発達心理学ハンドブック、福村出版 979.
- (4) 渡辺弥生 (2016). 学校心理学ハンドブック 教育出版 236.
- (5) 西山久子(2016). 援助サービスシステムのアセスメント 「学校心理学ハンドブック第 2 版—「チーム学校」の充実をめざして」.Part II,C 1-8. 日本学校心理学会編 . 2016 年 12 月 . P.120-121.
- (6) 渡辺弥生(2015).今の時代に必要なソーシャルスキルトレーニング 明治図書、200.
- (7) 渡辺弥生、原田恵理子(2015).中学生、高校生のためのソーシャルスキルトレーニング、明治図書、126.
- (8) 渡辺弥生(2015). 中 1 ギャップを乗り越える方法—わが子をいじめ、不登校から守る本、宝島社、223.
- (9) 渡辺弥生(2015).新教科 道徳はこうしたら面白い、図書文化、244.
- (10)小林朋子(2015)ソーシャルスキルの向上と学校危機の予防」:「中学生・高校生のためのソーシャルスキルトレーニング」渡辺弥生・原田恵理子編著,明治図書, 2015 年 12 月 p15-16.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/emywata/home>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

渡辺 弥生 (WATANABE, Yayoi)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：00210956

(2)研究分担者

西山 久子 (NISHIYAMA, Hisako)

福岡教育大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：80566852

小林 朋子 (KOBAYASHI, Tomoko)

静岡大学・教育学部・教授

研究者番号：90337733

(3)連携研究者 なし

(4)研究協力者 なし